

「浪花百景」研究

—作品に見られる歌川広重学習を中心に—

菅原真弓（大阪市立大学）

幕末の大坂で活躍した一珠斎国員、一養斎芳瀧、南粹亭芳雪の合作になる浮世絵版画シリーズ「浪花百景」（以下「本作品」）は、大坂の名所風物を描いた100枚より成る（目録2枚を含めて全102枚）。制作（刊行）年代については明らかでないが、現在のところ文久年間（1861～64）頃と考えられている（八反裕太郎「上方浮世絵における「浪花百景」の史的特質」、後述）。一般に大坂で刊行された浮世絵版画（上方浮世絵）については研究蓄積が薄い、上方浮世絵研究の多くを占める役者絵研究に比しても本作品についての関心は薄く、これまで美術史学の立場よりもむしろ都市景観論の観点からのアプローチが活発であった。しかし近年、大坂城天守閣や関西学院大学博物館などで展覧が行われ、八反裕太郎氏による「上方浮世絵における「浪花百景」の史的特質」（『浪花百景 大阪名所案内』図録、関西学院大学博物館開設準備室、2010年）が発表されることによって初めて美術史の俎上に上ることとなった。

本作品はしばしば『撰津名所図会』（寛政8～10年：1796～98）や歌川広重「名所江戸百景」（安政3～5年：1856～58）の影響を強く受けているとの指摘がなされ、いくつかの具体的な指摘も見られる。また八反氏は、それだけではない本作品の表現の特異性を指摘する。しかし広重からの影響については、図様の源泉となったと類推される作例がいくつか指摘されているのみであり、本作品に見られる広重学習の全容を明らかにしたものではない。

そこで本発表では、1、先行研究を踏まえた上で図様の継承についての新たな指摘、2、図様だけでなく構図や視点の観点からの広重学習の指摘、3、主に広重「名所江戸百景」との比較によるシリーズの全体構想に見る広重学習の指摘、を行うものとする。

本作品が最も強い影響を受けているとされる広重「名所江戸百景」は、自身最大規模の、そして晩年の代表作として知られる。生涯に渡って江戸の名所を描き続けた広重だが、「名所江戸百景」には独特の主題選択がなされたことが明らかになっている（大久保純一『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会、2007年）。すなわちそれまでの江戸名所絵には描かれなかった、市中あるいは周辺に住まう者だけが知る場所や祭りなどを取り上げているという特徴だ。また嘉永6年（1853）から刊行を開始した「六十余州名所図会」（～安政3年：1856）以降の広重は、積極的に縦型構図の名所絵を制作しており、3つの型に分けられること、そしてその意図についても明らかにした先行研究がある（菅原真弓『浮世絵版画の十九世紀』ブリュッケ、2009年）。

本発表では具体的な図様継承の指摘に加え、上記の先行研究を基に構図、シリーズの構想についても検討を加え、本作品における広重学習の全容を明らかにする。